

一次の文章は、西垣通『ビッグデータと人工知能』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および表記を一部変えたところがある。

「1 ロボットと会話する」というが、コミュニケーションが本当に生起しているのかどうか、まずそこから始めなくてはならない。なぜなら、言葉をはじめ、社会でつかわれる記号の「意味」の解釈は、コミュニケーションと^a フカブンだからである。意味解釈が大きく食い違いがえれば、会話のキャッチボールはできず、コミュニケーションは成立しない。

とりあえずコミュニケーションを、「閉じた心をもつ存在同士が、互いに言葉をかわすことで共通理解をもとめていく出来事」と※定義してみよう。何だかムズカシそうな定義だが、実はそうでもない。

たとえば二人の商人AとBが契約の話をしているとすると、「どうです、おたくにとつても、いい話じゃありませんかね」「いやまったく。そちらさんからのお話では、むげにお断りするわけにも行きませんなあ……ただまあ、もう少し景気がよくなるというんですが。ええと、ちよつとトイレどこですか」と言葉を濁してBが席を立ったとしよう。はたしてAは、契約の成立をどのくらい見こめるだろうか。

2 こういった腹の探り合い、共通理解のための意味解釈の相互交換は、コミュニケーションの典型例である。たえまなく揺れる意味解釈を通じて、推定作業が動的に続けられる。人間の社会的なコミュニケーションの多くはそういうものなのだ。

だから、言葉（記号表現）のあらわす意味（記号内容）は、言葉にぴったり付着した固定的なものではない。むしろ人間社会における多様な言語的なコミュニケーションの繰り返しを通じて、動的に形成されていくものだ。

3 さらに大切なことがある。人間の言葉は抽象化をおこなう。一つの言葉があらわす意味の幅は、コミュニケーションによって拡大され、多義的・多次的にふくらんでいくのである。たとえば座るためのさまざまな形態の家具は、みな「椅子」と呼ばれる。これは、コンピュータにさまざまな画像を見せて、その共通特徴を抽出する深層学習とは逆の作用である。それば

かりか、「彼がねらっているのは社長の椅子だ」というように、比喩的に椅子が「地位」を意味することもある。比喩的にイメージを重ね、ふくらませていく詩的作用が、人間の言語コミュニケーションの最大の特色に他ならない。

さて、コミュニケーションを人間の心のような自律的閉鎖系のあいだでおきる出来事と定義すると、機械と人間、または機械同士のあいだのコミュニケーションは本来、ありえないことになる。機械は他律的に作動する開放系だからだ。

実際、コンピュータ間通信は記号（デジタル信号）を送ればすむし、コンピュータに指令を伝えるにはキーボードから※コマンドを入力すればいい。そこに意味解釈などはいらぬ。ヨチはまったくない。この延長で、ロボットに正確な指令をあたえれば、ロボットは、プログラム通りの機能を実行するだろう。つまり原則として、コンピュータにとって「意味」の解釈など無縁のしろものなのだ。

ただ、人間が日本語や英語などの自然言語でコンピュータと会話しようとする、そこで一種の疑似的なコミュニケーション、疑似的な意味解釈がおこなわれることは事実である。では、ロボットと人間のあいだの「疑似的なコミュニケーション」の特色は何だろうか。

人間が比喩によって言語記号の意味解釈を動的に広げていく傾向をもつのに対し、※人工知能は逆に意味解釈の幅をせまめ固定しようとする。そして、論理的な指令（たとえば正確な機械翻訳の出力）に結びつけようとする。人工知能の自然言語処理においても「意味処理」はおこなわれているが、それらはことごとく、多義的な意味内容を一つに絞りこむための工夫なのである。

わかりやすく整理すれば、人間のコミュニケーションは詩的で柔軟な「共感作用」、人工知能の疑似コミュニケーションは指令的で定型的な「伝達作用」に特長があるということになる。むしろ、現実の社会的コミュニケーションでは両者が共存し、いりまじっているが、この特色の相違はとても大切である。もし、機械翻訳をふくめ人工知能技術を効率的に利用したいなら、なるべく定型的で機械的な情報伝達の場面に限定するほうが安全だ。

一方、仮に、※連句会や連歌会のような催しをおこない、人工知能ロボットを遠隔参加させれば、それが※チューリング・テストに合格することは難しいだろう。人工知能は過去の用例をもとに作動するから、陳腐な作品しかうみだせない。直感のするどい芸術家の目をごまかすことは難しいはずである。

ちなみに、人工知能に文学作品をつくらせるといった試みは、芸術活動としては明らかに邪道である。過去にない新たな作風の作品を創りだすのが近代芸術の大前提だからだ。コンピュータが効率よくマガイモノを大量生産して市場を制覇するならば、それは「芸術の死」を意味する。

以上述べてきたように、生物と機械とは異なる。それゆえ※シンギュラリティ仮説がとなえる※汎用人工知能の実現はきわめて困難なのである。関連して、⁴忘れてはならない核心的な論点を指摘しておこう。それは「感情」である（なお、感情[feeling]と情動[emotion]とを分け、前者は後者を基礎として成立する複雑微妙な存在と見なすこともできるが、ここでは両者をまとめて「感情」とよぶ）。

人間同士のコミュニケーションにおいて、感情が大切な役割をはたすことは言うまでもない。喜怒哀楽をはじめ微妙な感情のニュアンスから、われわれは相手の真意をおしはかるのだ。さて、近年では、「感情をもつロボット」というふれこみのペーパー君をはじめ、同じような可愛らしいロボットが相次いで製品化され、家庭のなかに入ってきた。だが、生物と機械とがまったく異質な存在だとすれば、ロボットが感情をもつなんてヘンだな、という素朴な疑問がでてこないだろうか。

感情というのは本来、生物進化のなかで生まれてきたものだ。動物、とくに哺乳類や鳥類は、子供を可愛がる。敵がくれば怖がって逃げたり、怒って襲いかかったりする。すべて身を守るため、子孫を残すための反応であり、行動である。感情をもつことが、生存競争と自然淘汰において有利に働いたことはまちがいない。感情がなければ、繁殖能力を高めて多産になるといった生存戦略をとらないかぎり、絶滅してしまう。いや、魚類のような多産な動物でさえ、餌食にならないように逃げまわらなくてはならないから、その神経反応に恐怖という感情の原始的萌芽をみとめることもできる。少産の動物である人間の感

情も、基本的にはこういった神経反応をベースにしており、生存戦略的な機能ととらえられるのだ。

それなら、生きているわけでもないロボットに感情があるとは、いったいどういうことなのか？——まあ、感情がありそうな振りをする※シミュレーションなのさ、と言ってしまえばそれまでである。ロボットはペットのイヌやネコとは違う。まともな大人なら、ペーパー君と遊びながらも、そこに真正銘の感情をみとめることなど無いだろう。よくできた面白い玩具（がんで）、電子カラクリ人形といったところだ。

…（中略）…

人間の※大脳新皮質は、確かにコンピュータのような論理的な思考をおこなうことができる。大脳新皮質をもつのは哺乳類だけで、そういう生物種が出現したのは進化史上、比較的あたらしい。

何億年も前の原始的な動物の神経系は、代謝をはじめ主に生命維持の機能をうけもっていた。それは身体の諸器官と一体でフカブンである。やがて時がたち、※大脳辺縁系の発達とともに、哺乳類をはじめ感情らしきものをもつ動物があらわれる（可愛いペットの行動をながめれば、イヌやネコに感情が無いと断言することは難しいだろう）。そしてついに、大脳新皮質が異常に発達し、論理的思考の得意な哺乳類、人間サマが登場したという次第だ。

大切なのは、こういう脳神経系の進化が、原則としてアドオン（入れ替えでなく付加）の形でおこなわれてきたという事実である。つまり、原始的な脳の機能は消滅したわけではなく、保存されたまま、高度な機能がつぎつぎに追加されていったのだ。だから、大脳新皮質の理性的なはたらきのベースには、感情の波がうねっており、さらに生理的な諸反応のネットワークがあるのである。われわれも、体調が悪いとイライラするし、気分が悪くてどうしても冷静な判断ができないことなど、よくあるではないか。

とすれば、脳の作動も、身体諸器官の作動から切り離すことはできない。⁵脳の論理的機能だけに着目しては駄目なのである。「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」と※看破したジェイムズ・ラング説も、こう考えてくると納得がいく。

生理的・身体的な反応がまず生じて、それが事後的に脳のなかで概念化されるのである。むしろ、脳は身体的な反応の中継基地と見なせるから、脳の分析は大切だろう。だが、人間が数十兆個もの細胞の集合体であり、それぞれの細胞が生きている以上、脳以外の身体器官を無視するのは暴論なのだ。

さて、ここまで来ると問題がはつきりした。ロボットに搭載された人工知能は、基本的に、論理処理をおこなう機械である。そして、ロボットの「体」は、多細胞生物である動物の体とはちがって、あくまで人工知能の指令にしたがって動く忠実な物体である。

とすれば、「感情をもつロボット」とは実に奇妙な存在だ。

※定義：ものごとの意味や内容を言葉ではつきりと決めること。

※コマンド：命令。指令。

※人工知能：学習・記憶・推理・判断など、人間のもつ知的機能を代行するコンピュータシステム。

※連句会や連歌会：ルールに沿って詩歌を作成し、批評し合う集会。

※チューリング・テストに合格すること：ここでは、機械が作成したものを人間が作成したように思わせること。

※シンギュラリティ仮説：人工知能が人間の能力を超え、人間が予測・管理できない知性が誕生するという仮説。

※汎用人工知能：一つの分野ではなく、様々な範囲に及ぶ知能を持ち合わせた人工知能。

※シミュレーション：現実想定される状況を設定して試すこと。

※大脳新皮質：脳の中で、合理的で分析的な思考や、言語機能をつかさどる部分。

※大脳辺縁系：脳の中で、食欲などの本能や喜怒哀楽や睡眠などをつかさどる部分。

※看破：見ぬくこと。

問1 — 線 a 「フカブン」・ b 「ヨチ」を漢字で正しく書きなさい。

問2 — 線1 「ロボットと会話する」とあるが、人工知能技術をうまく利用するにはどうしたらよいと筆者は考えているか。その内容を説明した最も適当な一文を本文中からさがし、そのはじめの5字をぬき出しなさい。

問3 — 線2 「こういった腹の探り合い、共通理解のための意味解釈の相互交換は、コミュニケーションの典型例である」とあるが、「コミュニケーションの典型例」としての「腹の探り合い」とはどういうことか。50字以内で説明しなさい。

問4 — 線3「さらに大切なことがある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア コンピュータは多様な事例を認識し、その特徴的な部分をぬき出すことで意味の選択肢を増やすことができるが、人間は言葉によって抽象化をおこなうだけでなく、ある言葉について会話の中で状況に応じて使い分けられるので、意味の幅を広げていくことができるということ。

イ コンピュータは用例を多く取り込み、その重なる部分をぬき出すことで意味の幅を増やすことができるが、人間は言葉によって抽象化をおこなうだけでなく、ある言葉について会話の中で相手が使っている用例を新たに知ることができるので、意味をふくらませることができるということ。

ウ コンピュータは多くの事例を認識し、その特徴的な部分をぬき出すことで意味を決定することができるが、人間は言葉によって抽象化をおこなうだけでなく、ある言葉について会話の中で元の意味を利用して新しい意味内容を加えることができるので、意味の多様性をもたらすことができるということ。

エ コンピュータはなるべく多くの事例を取り入れ、その重なる部分をぬき出すことで意味的中率を上げることができるが、人間は言葉によって抽象化をおこなうだけでなく、ある言葉について会話の中で意味内容を想像することができるので、意味を多次的にふくらませることができるということ。

オ コンピュータはいろいろな事例を取り込み、その共通した部分をぬき出すことで意味を限定することができるが、人間は言葉によって抽象化をおこなうだけでなく、ある言葉について会話の中で共感しながら意味を使い分けることができるので、意味の多義性を認識することができるということ。

問5 — 線4「忘れてはならない核心的な論点を指摘しておこう。それは『感情』である」とあるが、「感情」という観点で生物とロボットの違いを説明したものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生物の感情は進化の過程で芽生え、コミュニケーションにおいて相手の気持ちを推し量るための大切な機能であるが、ロボットに搭載された感情とされている機能は、人間の感情を正確に読み取れず、本当の感情と認められない。

イ 生物の感情は進化の過程で芽生え、危機的状況をかわして自然界で生きぬくための大切な機能であるが、ロボットに搭載された感情とされている機能は、場面に応じて決められた態度をとることしかできず、本当の感情と認められない。

ウ 生物の感情は進化の過程で芽生え、子供を可愛がることができ子孫を残すための大切な機能であるが、ロボットに搭載された感情とされている機能は、子供にうまく対応することはできず、本当の感情と認められない。

エ 生物の感情は進化の過程で芽生え、敵から身を守り自然界で生きのびるための大切な機能であるが、ロボットに搭載された感情とされている機能は、敵や味方の判別をすることができず、本当の感情と認められない。

オ 生物の感情は進化の過程で芽生え、恐怖や怒りを感じることで自然界で身を守るための大切な機能であるが、ロボットに搭載された感情とされている機能は、生物の神経反応を十分に再現できず、本当の感情と認められない。

問6 — 線5「脳の論理的機能だけに着目しては駄目なのである」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の脳は、感情の仕組みが土台となり、その上に論理的思考をする仕組みができた結果、感情の認識と同時に行動を取ることができるようになったのであり、身体と離して考えることはできないから。
- イ 人間の脳は、生命維持機能を受け持つ仕組みがあり、その上に感情や論理的思考をする仕組みができた結果、感情を認識してから行動を取るようになったのであり、身体と離して考えることはできないから。
- ウ 人間の脳は、生理的機能を受け持つ仕組みだけでなく、その上に感情や論理的思考をする仕組みができた結果、身体的な反応が感情の認識より先に生じるようになったのであり、身体と離して考えることはできないから。
- エ 人間の脳は、生理的な反応をする機能だけでなく、その上に論理的な思考をする仕組みができた結果、論理的に感情を整理してから行動を取るようになったのであり、身体と離して考えることはできないから。
- オ 人間の脳は、感情の働きが基本にあり、その上に理性的な働きや生理的機能の仕組みができた結果、身体的な反応が生じてから感情が生まれるようになったのであり、身体と離して考えることはできないから。

問7 6 に入る最も適当な語句を本文中からさがし、漢字3字でぬき出しなさい。ただし、最後の一字は「的」である。

二次の文章は、辻村深月『ロードムービー』の一部である。トシとワタルは小学五年生。自他ともに認めるクラスのリーダーだったトシは、学校の代表である児童会長になることを目指していた。しかし、気が弱くいじめられっ子のワタルと親しくなったために、クラスメートから孤立してしまふ。以下の文章はそれに続く部分である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および表記を一部変えたところがある。

1 夏休みの間、ちよつとした発見があった。トシの学校では、夏休みの間プールの宿題が出る。休み中、最低五回以上は学校のプールに通わなければならない。PTAの係になっている親がプールの監視員の当番を順に引き受けて、カードにスタンプを押してくれる。

トシは泳ぐのだって得意だし、プールが好きだ。だけど、今年はクラスの連中に会いたくなくて、気乗りしなかった。そして、それは向こうもそうらしい。アカリとその取り巻きたちは、トシがプールに来るのを露骨に嫌がった。アカリが悪口を話す時の声は、トシに聞かすためいつも大きかった。もう全然「ひそひそ」なんてレベルじゃなかった。その声を背中に受けながら、一人でプールの身支度をするのは正直しんどかった。

が、トシは不思議なことに気がついた。

アカリさえ来ていなければ、クラスメートたちはトシに普通に接するのだ。これまでと同じように挨拶し、話しかける。トシの泳ぎをすごいと褒めたり、トシがワタルと話す内容を横で聞いて、笑ってコメントするヤツまでいた。

アカリや、それにアカリの取り巻きが来ると慌てたようにまたトシを無視する。A ぎこちない接し方ではあったけど、彼らが後ろめたそうな表情で、トシとワタルをチラチラ見ることも何回もあった。

…(中略)…

二学期が始まり、学級委員の改選が行われた。

立候補を先生が募ると、すぐに新田アカリが手を上げた。「はい」と言っ、頬にとびきり愛らしいえくぼを作る。トシの思っていた通りだった。

トシも手を上げた。

どうやら、2 アカリの予期していない展開だったらしい。上がったもう一本の腕を見て、彼女が嫌そうに顔を顰めた。まだやるわけ？ アカリの口が横の女子に向け、声を出さずに動く。懲りてないわけ？

正直、勝てるとは思っていなかった。ただ、一つだけ確かめたいことがあった。夏休み中、アカリのいないところでクラスメートの見せたあの表情。

アカリとトシは立ち上がった。お互いに、委員長になった時の抱負を発表し合う。

人前で意見を言うのがトシは好きだ。それに得意だと思ふ。けれど、今日だけは別だった。立つと同時に肩が熱くなる。普段と比べてしつかりと準備のできなかつた抱負を口にして、クラスメートからの視線に耐え、発表を終えて座ると同時に自分の心音がドクドク頭の中に響いた。頼む、と思つた。3 ここはまだ第一歩なんだ。

トシの学校では小学校二年生から学級委員を決めるようになる。そして、トシは一度も学級委員にならなかつたことがない。クラスにトシがいると、まるで ① 委員長には他に誰も立候補しない。いつだって、そこは自分のために空いている席だった。

生きた心地がまるでしない時間が流れた。投票までの間がすごく長く感じられた。小さな四角い藁半紙が配られ、黒板の前に置かれた小さな段ボール箱に、次々と紙が投げ入れられた。

開票され、先生が名前を読み上げていく。一学期まで書記を務めていた女子が黒板にトシの名前とアカリの名前を書く。正の字で、票数を入れていく。

夏のプールで、トシの泳ぎを褒めてくれた津島くんや山口さん、トシの母さんを美人だと言つて笑いかけてくれたトモユキ

の顔が次々と浮かぶ。ハヤカワ先生が、投票用紙に書かれた名前を読み上げる。

新田、アカリ、アカリ、アカリ、アカリ、新田、アカリ、アカリ、アカリちゃん、新田アカリ、新田さん。

「トシ」

やつとのことで名前を呼ばれるが、トシは正面を睨み続ける。痛いほど自分の顔に視線が注がれているのがわかる。頬もおでこもピリピリする。

アカリ、アカリ、アカリちゃん……

「トシ……あ、いや、アカリ」

先生の声が②言い直す。予感がして、トシは立ち上がった。ハヤカワ先生の目は困ったように翳る。手にしていた投票用紙を握りつぶそうとした。トシは近づき、引たくるよう先生の手から紙を奪う。見た瞬間、息を吸い込んだ。深く考えるなど自分に言い聞かせる。それからそれを一息で読み上げた。

「『トシなんか死ね！ アカリに清き一票』」

トシの声が響き渡った瞬間、それまでも静かだった教室の中にしんと本物の沈黙が降りた。クラスの中で一番の乱暴者、口が悪いと普段から先生によく注意されているユウタにみんなの視線が集まる。ユウタもそれを感じたのだろう、少しして「何だよ！」と怒鳴った。それを合図にみんなユウタから視線をそらす。当のユウタも黙りこくった。

違ふよ。

トシは思う。

ユウタは③口が悪い。トシも声高に悪口を言われたことがある。だけど、きっとユウタじゃない。

トシなんか死ね。書いたのは、顔のない「誰か」だ。

ハヤカワ先生がトシを見つめる。静かな声で、それから命じる。

「席に戻りなさい」

言われるまでもなかった。トシは手にしていたアカリへの一票を再び箱に投げ入れて戻すと、⁴ 4 大股に歩いて自分の机に戻った。

トシの考えが甘かったことは、もうわかった。トシのクラスは全部で二十九人いる。

二十七対二。アカリの圧勝だった。

副委員長をやってみないか？ というハヤカワ先生の気遣いを断って、トシは入学以来、初めて学級委員を務めないことになった。学級委員をしない場合、何か別の委員会に所属することになる。トシはもう何でも良かった。結局、ワタルと二人で一番人気のなかった栽培委員をすることになった。校庭の花壇の世話をする委員で、休日にも水やり当番があるため、あまり人気がないらしい。

選挙の後、他の委員を決めるまでの間、ワタルが大変だった。

結果が出て、アカリが委員長になった瞬間だった。ワタルが泣き出した。大声で、両手を振り回して泣き出した。トシが「泣くな！」と怒鳴っても泣きやまない。ワタルは気が弱いし、確かによく泣きそうな顔をする。しかし、本格的な泣き顔を見るのも、泣き声を聞くのも初めてだった。

「なあに、あれ」

アカリの友達が言って笑う。と、その時だった。先生が「やめなさい」とぴしやりと言った。毅然とした言い方だった。

「自分自身が何かされたわけじゃないのに、友達のために泣くんだ。それができるような人が、この中に何人いると思う？」 普段注意を促す時のような、大きな怒鳴り声ではない。先生のこんな威圧感のある声は聞いたことがなかった。

栽培委員になることは、だからトシが勝手に決めた。泣きやんでからそのことを謝ると、ワタルはただこくと頷いた。

この選挙は、アカリにとっては輝かしい勲章の一つになったようだった。トシには、自分自身とワタルからの二票しか入らなかった。恥ずかしいよね、自分のとワタルなんかのとそれだけだよ。他はみんな嫌ってんだよ。ずっと学級委員だったのに、今回なんだと思う？ 栽培だよ、栽培！

下校時間になって、下駄箱でアカリの声が聞こえた。他のクラスの生徒に ④ 自分の手柄を聞かせる。無視して、上履きを履き替えながらトシはワタルがまたキレないといけどと思った。ワタルのアレは泣いたんじゃない。きつとキレたんだ。ワタルは俯いたまま黙って靴を履いて、トシのあとをついてくる。肩を並べて外へ出る。お互いに言葉を交わすことなく、足元を見つめながら歩く。すれ違う他の学年の生徒まで、全てがみんな、今日あったことを知っているような、嫌な気分だった。帰る途中、いつか夕焼けを見た三角公園の前で足が止まった。無言のまま、二人してランドセルを放り投げてブランコに腰かける。錆びの浮いたブランコは軽くこいだけで、キイキイと軋む。

ワタルは俯いてブランコの鎖を握っているだけだった。動かそうともしない。キイキイ、キイキイ、トシのブランコだけが音を立てる。

「トシちゃん」

ワタルが顔を上げた。

「何？」

あまり話をしたい気分じゃなかった。ずっと黙っていたかった。けれどワタルは先を続けた。

「児童会長になるの、やめるつもり？」

「つていうか、なれるわけないっつーの」

B 間髪入れず、トシは答える。何だ、と舌打ちが出る。やっぱりその話か。あんなに宣言して見せるんじゃないかった。

「オヤジ言つてたもん。地元がすっかりしてないと、選挙つてのは勝てないんだって。……あの勢いだと、新田アカリが児童

会も出るんじゃないの？ 勝てそうだし」

「そうかなあ」

「そうだよ」

地面を蹴って、さらにブランコを高く上げる。唇を噛んだ。ブランコの鎖が大きくキイツと悲鳴を上げる。このまま鎖が切れてしまえばいいと思った。鎖が切れれば、トシはブランコごと、空に舞いあがるだろう。そして落ちて大怪我をするだろう。怪我をすれば、母さんの病院に入院して、日がな一日母さんに世話を焼いてもらえる。

ワタルがトシの方に体を傾ける。身を乗り出すように言った。

「アカリちゃん、羨ましいんだよ。トシちゃんのことを。トシちゃん、頭がいいし、何でもできるし……」

「だから？」

トシはそっけなく叫ぶ。叫ばなければ、動いているブランコの上の声は隣のワタルまで届かない。また地面を蹴る。ブランコがさらに高い場所まで自分の身体を運ぶ。

「やろうよ！」

ワタルが言った。悲鳴のような声で叫んだ。

「やろうよ！ 会長になってよ！」

無視して地面を蹴り続ける。立ってこいだ方が、もっと高く飛べるだろうかと思ひ直し、少し速度を落とそうとしたその時だった。

ワタルの手が、まだ前後に振り動いている鎖をぐいっとつかんだ。トシを乗せたブランコがバランスを崩して大きくぐらんと揺れる。足を咄嗟に前に突き出したおかげでブレーキになったけど、危うく振り落とされるところだった。揺れに合わせ、足が前の地面に大振りな線を描いた。

「危ないなあ！」

怒鳴ってワタルの顔を睨み、トシはそこではつと表情を止めた。ワタルはいつかのような真っ白い顔をしていた。唇も青紫だった。ブランコの鎖を握り締めたままの手が震えている。こんなワタルの細い手のどこに、あんな力があつたんだろう。上履きを捨てられたあの時にはわからなかったワタルのこの表情の意味に、トシは初めて気がついた。

X

「トシちゃん」

ワタルが言った。

「児童会長になろう」

トシは唇を噛んだ。額のあたりがうずうずと痛い。鼻の奥がつん、と急に痛くなった。ヤバイと思うより先に、5肩から力が抜けてしまった。悔しかった。すごく悔しかった。奥歯を必死に噛み締める。けれどどうしようもなかった。

目からぼろぼろと涙がこぼれた。口から泣き声が出た。

ずっと平気なはずだった。今までもこれから、ずっとこんなことぐらい平気なはずだった。こぼれた涙が鼻を伝い、頬を伝い、唇に入る。ブランコの鎖をつかんだせいで鉄臭い手のひらをあてて、トシは目を押さえる。後は、Cひっきりなしに嗚咽がこみあげた。

児童会長になりたい。本当になりたい。ごまかせなかった。

問 1

——線 a「務」・ b「注」の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問 2

①④に入る最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし同じ記号は一度しか使えないものとする。

- ア 誇らしげに
- イ おもむろに
- ウ 不自然に
- エ 不安げに
- オ 心得たように
- カ 確かに
- キ はにかむように

問3

線A～Cの本文中の意味として最も適当なものを後のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 「ごちない」

ア よそよそしく冷淡な

イ わざとらしく思わせぶりな

ウ なす術もなく投げやりな

エ 子どもらしく素直な

オ なめらかでなく不自然な

B 「間髪入れず」

ア きつぱりと大声で

イ ためらうことなくすぐに

ウ 気まずそうなようすで

エ あきらめきれずに

オ 慌てたようすで

C 「ひっきりなしに」

ア 途切れ途切れに

イ こらえ切れずに

ウ 思いがけず突然に

エ 間を空けず次々に

オ 感情のままに

問 4

——線 1 「夏休みの間、ちよつとした発見があった」とあるが、トシはどのようなことを発見したのか。その内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア アカリとその取り巻きたちはトシやワタルが夏休みのプールに来るのを嫌がり、身支度中でさえもトシに聞こえるようにわざと大きな声で悪口を言うため、周囲のクラスメートたちはトシを気の毒に思っているようすであるということ。
 イ トシが夏休みのプールでアカリやその取り巻きたちに会いたくないと思っているのと同じように、アカリたちもトシと会うことを嫌がっているため、それをまわりで見ているクラスメートたちは気まずそうなようすであるということ。
 ウ クラスメートたちはアカリたちがいない時だけトシやワタルと話をしていたが、プールで一緒に泳ぐうちにこれまでと同じように仲良しくしてくれるようになり、トシたちと話すことが楽しみになってきているようすであるということ。
 エ クラスメートたちはアカリたちがいないとトシやワタルとこれまで通りに接してくれるが、彼女たちがプールに来ている時には話しかけることができず、トシとワタルに対して申し訳ない気持ちでいるようすであるということ。
 オ クラスメートたちはいつもは仕方なくトシやワタルを無視しているが、夏休みのプールの時だけは泳ぎの上手なトシを褒めたりワタルと話をしてくれたりして、アカリたちの態度を内心では不快に思っているようすであるということ。

問 5

——線 2 「アカリの予期していない展開」とあるが、アカリはどのような展開を予期していたと考えられるか。40 字以内で説明しなさい。ただし、人物名を明確にして説明すること。

問 6

——線 3 「ここはまだ第一歩なんだ」とあるが、児童会長になることを目指しているトシがこのように考える根拠にある一文を本文中からさがし、そのはじめの 5 字をぬき出しなさい。

問 7

——線 4 「大股に歩いて自分の机に戻った」とあるが、ここでのトシの気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 悪意のこもった投票用紙を目にして、こんなひどいことを書いたクラスメートを何としても突き止めたいと思うとともに、みんなも心の中ではアカリやその取り巻きたちを嫌っているのではないかという考えが間違っていたことに対しての腹立たしさをぶつけようとする気持ち。

イ 悪意のこもった投票用紙を目にして、クラスメートがプールで見せてくれた親しげな態度にだまされたことに腹を立てるとともに、自分を学級委員として支持してくれるクラスメートが何人かはいるのでないかという考えが間違っていたことに対しての戸惑いを取りつくるおうとする気持ち。

ウ 悪意のこもった投票用紙を目にして、アカリやその取り巻きたちが学級委員選挙にまで手を回していたことに驚くとともに、彼女たちのクラスメートに対する影響力もそろそろ薄れてきているだろうという考えが間違っていたことに対しての絶望感を紛らわそうとする気持ち。

エ 悪意のこもった投票用紙を目にして、クラスメートのほとんどが学級委員としてアカリを支持していることに驚くとともに、自分がクラスメートの誰よりも学級委員にふさわしいのだという考えが間違っていたことに対しての恥ずかしさをこまかそうとする気持ち。

オ 悪意のこもった投票用紙を目にして、無責任な中傷のことはにやり場のない怒りを感じるとともに、夏休みのプールで親しげに接してくれたクラスメートは自分に投票してくれるかもしれないという考えが間違っていたことに対してのやりきれなさをこらえようとする気持ち。

問 8

X

に入る一文として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ワタルは怯えている。

イ ワタルは怒っている。

ウ ワタルは悲しんでいる。

エ ワタルは落ち込んでいる。

オ ワタルは期待している。

問9 — 線5「肩から力が抜けてしまった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 学級委員の選挙で負けてしまったので児童会長になることもあきらめようとしたが、普段はおとなしいワタルが一生懸命に励ましてくれたため、もう一度児童会長を目指す勇気がわいて気持ちが楽になったから。

イ 学級委員をめぐってアカリと対決した今日の選挙では絶対に勝とうと緊張していたが、アカリの圧勝という予想外の不本意な結果に、このままでは児童会長にはなれないという悔しい気持ちがこみ上げてきたから。

ウ これまではアカリたちクラスメートにいじわるをされても気にしないと自分に言い聞かせ耐え続けてきたが、ワタルの心からの説得の言葉をきっかけに、今まで抑えていた悔しさをこらえきれなくなったから。

エ クラスのみんなから無視されても児童会長に選ばれるために必死で耐えてきたが、このままでは自分はまだ児童会長にはなれないと思うと、本当に児童会長になりたいという気持ちがごまかせなくなったから。

オ 選挙で負けて学級委員になれなくてもワタルの前では平気なふりをして悔しい気持ちを隠していたが、自分の力のなさを改めて痛感し、児童会長にはなれないかもしれない自分自身の将来に失望したから。

三 AとDの各文の——線と同じ漢字を使うものを後のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 出身学校の沿カクを調べる。

ア 冰山の一カクにすぎない。

イ 人材を集めて組カクする。

ウ 技術カク新が大きく進む。

エ 辞書でカク数を調べる。

B 石油のセイ製工場に行く。

ア 新しいセイ活が始まる。

イ セイ密機械を開発する。

ウ セイ功体験を積み重ねる。

エ 各国のセイ治に関心を持つ。

C 復コウ事業に力を入れる。

ア コウ海を安全に終える。

イ 濃コウなソースをかける。

ウ 算数のコウ式を覚える。

エ 各地で演劇をコウ行する。

D

問題を検トウする。

ア 道に街トウがともる。

イ 国をトウ一する。

ウ トウ論会を開く。

エ ケーキを三トウ分する。

問題は、これで終わります。

